

やっぱりせつかくみんな日本語で話せるんだから、も

っと話し合えるのに

語り手 奥村智恵子（日本語講師） 聞き手 長岡優芽

立命館守山との出会い

―先生が立守に來られたときのお話を聞かせてください。

それが、たしか二〇一〇年の五月頃だったかな。二〇一〇年に引越してきてただけど、「これから何をしようかな」って考えていたときに、一本の電話がかかってきたんです。「実は、タイ人のTちゃんっていう女の子がいるから、その子に日本語を教えてほしい」っていう内容でした。私はその四月、引越してすぐに守山市の国際協会にボランティア登録をしていて、それを見て、今いらっしやらないけど、O先生という方が電話をくださって。それがきっかけで、Tちゃんの日本語を担当したというのが一番初め。英語のボランティア、日本語を教えてくださいつて。Tちゃんは六月からしばらくいて、翌年の三月に帰ったのかな。そのあと、フィンランドから男の子が来て。結果的に、最初の二年間はボランティアとして日本語を教えていました。まだ留学生が少なかった頃かな。そう、この図書館で。当時は国際部もなかったんで、この場所でもTちゃんもA君（フィンランドから来た男の子）も教えました。そして、その二年経ってから、日本語教師という形で正式に採用されて、それから十二年目か、十三年目か。うん。トータルでは、もう十五年になります。

―じゃあ、立守のかなり初期から関わっておられるんですね。

うん。そうね。でも、当時はあんまり日本の学生とか教員の先生方と関わる機会がなかったんで、深く関わるようになったのは、実は最近なんです。国際部ができてから、私が立守以外で関わってきた場所や経験と繋がったり、繋がったりして、だんだんこう私自身も「居場所」が増えてきたかなっていう感じです。

―そもそも、なんでボランティアをしようと思ったんですか。

やっぱり、海外でお世話になった経験があったから。自分がね、周りの人に助けられてきたから、何か恩返しできたらなと思って。ブラジルに三年いたし、ポルトガル語もまあ話せるから、それを使って何かボランティアできたらなと。日本語教師でもあったし。それで、国際協会に登録しに行ったら、すぐにここからお話が来たから。

―なんでブラジルだったんですか。

私は千葉県の香取市出身なんですけど、対岸に鹿島臨海工業地帯という工場労働者の町があつて、たくさんの方の外国の方が働いてて、そこにブラジルの人もいっぱいいたの。鹿島アントラーズというサッカーチームがあるんだけど、ジーコとかアルシンドとか有名な選手もいて、ブラジル人がたくさん住んでて、対岸から通ってる人もいた。その頃、スーパーで買物に困ってるブラジル人をよく見かけて、私はまだブラジルに行く前の話だったんだけど、「これは大変だ」と思って、近くの公民館で日本語を教えるようと考えました。当時、日本語教師試験を第一回で受かった方が一人いて、私はまだ日本語教師の資格を取りに行く前だったんだけど。二人で「始めよう」となって、派遣会社の人に連絡をしたんです。説明会を開いたら、百人近くの方が来て。それだけ困ってる人が多いのかっただと思えます。それが、日本語教師になろうかなと思ったきっかけ。場所のおかげもあったのかな、きっと。外国人がたくさん住んで

ただ、田舎の町だったから、そういうのを支援しようっていう仕組みがなかったんだよね、きつとね。それで始めてみた。そこで出会ったブラジルの人たちとたくさんお話ししたり友達になったら、「あ、ブラジル、行ってみたいな」っていうふうに思っ、行ってしまったのよ（笑）。ふふっ。行きたいなって言ったら、行けた、っていうか。――日本語を教えてほしいっていう電話がかかってきたとき、立守の印象ってありましたか。

どんな印象か。あー、でもすごく嬉しかったかな。「自分はここで何ができるのかな」と考えてた時期だったから。自分が住んでいたところから引越してきて、ボランティアでも何かできるかなと思ってたときだったから。すごくウキウキするっていうか、楽しそうだなと思って。来てみたら、こんなきれいな学校でしょ。「どこから入るのかな」と最初思いながら。初めて会ったＴちゃんが、また可愛らしい女の子で、気づいたらあつという間に一年経ったかなという感じ。その後も留学生が続けて来てくれて、本当にいい環境で、日本語を留学生と一緒に勉強できる、すごいいいなっていう感じ。

――じゃあ、迷いはなかった感じですか。

教えるのは、うん、全然なかった。だから、ご縁があつて良かったなと思ったけど（笑）。ただ、日本の学生と関わるようになったのは、ほんとここ最近なので。留学生のホストやバディの生徒とはお話ししたりしたけど。国際協力の授業が始まって、クラスに行つて、みんなの前で話すっていうのが新鮮だった。千葉では教員をしてたので、慣れているはずだったけど。

*

留学生から見た立守

――留学生の子たちが立守に来たとき、びっくりすることとかつてありますか。どんなイメージを持っていたのかなと思つて。

そうね。部活に関しては、いつもとても驚いてるかな。いろんな部活があるから、興味があるみたいで、いろいろ見学に行ったりさせてもらうけど。あと、制服。制服はすごく楽しんでるね。だから短期で立守に来る留学生、一週間、二週間、二日、三日だけの人でも、制服を試着してみる時間をとったりして。

――コーディネートが、ということですか。

そう。たぶん、制服そのものがない国も多いしね。なんだろうな。あと立守ダンス。よくあのカフェのガラス張りのところで踊っていたりして。はじめはちよつとふざけたりしてるけど、楽しいみたい。体育の授業も、ちよつと感じが違うもんね。海外だと「もつとこう、プレーしよう」みたいな大まかな感じだけど、日本の場合は準備運動がすごくきっちりしているとか、ゲーム前の練習が多かったりする。やっぱりいろいろ違うところはあるのかな。授業の内容も、自分で考える授業が多いよね。そういうのに積極的に参加できればいいんだけど、なかなか難しいのかな。探究の学習に参加するのは、留学生にとってはちよつと難しいかな。いつも言ってるのは、留学生は「もつと話してほしい」と思っているけど、日本人の学生はシャイだから、なかなか挨拶しても、挨拶だけで終わつて、そのあと会話が続きにくいことが多い。もつと一緒に弁当当食べたり、お話ししたいと思つているけど、そういうところがちよつと難しい。

――先生が留学生と関わつてゐるなかで、印象深かったエピソードとかありますか。

R君っていう、オーストラリアの男の子がいて。サッカー部に入ってたんだけど。ある日、カフェでお昼ごはんを食べていて、たくさん人もいるのね。そのときは留学生が五人いて。その中で、フランス人のWちゃんが生誕日だったの。みんなでケーキを買って、R君がM君と相談して、R君が立って、「今日はWの誕生日です。みんなでハッピーバースデーを歌いましょう」って。カフェ中のみんなで、Wちゃんのためにハッピーバースデーを歌ったんです。あれは、とても印象に残ってる。ものすごい素敵な瞬間だったなと思って。ああいう交流ができれば、いいよね。

—自分たちでケーキ用意してですか。

そうそうそう。本当にいい思い出。その子たちは、今でもときどき帰ってきて、遊びに来てくれるけど。やっぱり、この立守で過ごした時間が良かったんだらうね。「楽しかった」って言うてくれて。そういう思い出を持って帰ってくれたら、本当に嬉しいんだけど。だから、少しずついいから、そういう交流を日本の学生と一緒にやっていけたらいいなって。交流ができればいいなって思ってる。

*

立守ブランド

—最近、校則も変わってきてて、髪を染めてる人とかも結構出てきてるんですけど。留学生の子たちは、もともと髪色も全然違うじゃないですか。

そうね。私は、見た目を変えること自体は、全然問題ないと思って。私自身もラチーノ学院（東近江市にある日系ブラジル人の子どものたちを中心とした学校）に、週に一回ボランティアに行ってるんだけど、みんなピンクの髪だったり、赤い髪だったり、マニキュアも本当にきれ

いにしてるし、ピアスもいっぱい、鼻ピアスもあるし。だから、髪の色が変わってても、特に何とも思わなかったかな。迷惑かけない範囲だったら、別にね、自己表現だからね。ブラジルの子たちも、TPOに合わせて考えることはちゃんとできる。そういう意味では、立守の子たちも、もちろんできるだろうから。立守って、すごくこう「ブランド力がある」って言ったら変だけど、守山市内や滋賀県内の人とお話していると、やっぱり期待されている学校なんだな、というのを感じる。「期待に応える」って言ったら変だけど、周りから「こうあってほしい」っていうイメージを持たれている学校だから、そういうところは大事にしていけたらいいのかな、とは思っけど。でも、立守生が赤い髪だったら、やっぱりみんなびっくりするかもね。

—確かに。

うんうん。そうだけど、「ちゃんとしてる」っていうのが伴っていれば、別に赤い髪でもいいと思うけどね。

—先生が思う、立守生の印象ってどんなものがありますか。

私は外国の人と関わる時間が長いから、やっぱり日本人って、どうしても様子を見るところがあるのかな、とは思ってる。周りの出方を待つ、みたいな。私はよくボランティアに行くんだけど、ブラジルの人ってあんまり人の目を気にしないというか、「自分は自分」のところがすごく強い。思ったら言うし、「これ言ったらどう思われるかな」って、あんまり考えてないと思う。日本社会で暮らしている日系の人たちは、少しずつそういう部分が変わってきているかもしれないけど。でも、そういうところは立守生だけじゃなくて、日本人全体に感じてる。だから、留学生も、例えば「日本人とドイツ人ってとっても似てる」と言われるけれど、ドイツ人は、一度こうと決めたら曲げないし、すごく自分

の意見をはっきり言う。一方で、日本人は状況をちよつと考えて、「これ言ったらこの人に都合悪いかな」とか、「こうしとこうかな」って考えられる、優しい目を持てると思う。ただ、その分、あんまり喋らないな、っていう印象もある。国際協力のグループワークを見ていても、あまりグループ内で話し合いになってないというか、そういうのはちよつと感じる。もちろん、「ベトナムの技能実習生に日本語を教える」という題材自体が難しいからだとは思いますが、もつとたくさん意見出した方がいいのになって思う。難しいね、グループで意見をまとめていくっていうのはね。でも、そういう練習はしていた方がいいのかなと思う。たくさんそういう場面がこれから出てくるからね。やっぱり社会に出たら、一人で決める場面もあるけど、みんなで話し合って決める場面のほうが、圧倒的に多くなるから。もつと、どんどん意見を出し合えるような環境になったらいいかと思う。留学生は逆に、なんか自分の意見を言い過ぎて、なかなかまとまらないこともあるからね(笑)。それはそれで、おもしろい。

―集団での意見の出し方、ということですか。

そうそう。だから、例えば、四、五人で「今日カフェどこに行く?」とか言ったら、必ずみんな意見言うもんね。全然決まらないというか。でも、いつの間にか一こに決まってる、みんなでワイワイ出かけてたりとか。

―優柔不断、という感じじゃないんですね。

割とはっきりしてる。たぶん、その時間を「楽しもう」としてるからなのかな。なんか言葉を発したら、コミュニケーションが取れる、っていう感覚を、すごく肌で感じてるから彼らは。やっぱり喋らないと、伝わらないしね。ただ、日本人の学生も、「伝えたい」と思ってるけど、

その言葉が出てこない、っていうもどかしさはある。やっぱりせっかくみんな日本語で話せるんだから、もつと話し合えるのにな、って、私はその授業見てると思うんだけど。だって母語だしね。まあ母語じゃない人もいるかもしれないけど。もつと意見を出し合えたら、同じ言葉を話す同士なんだからって思う。

＊

『先生』という感じでいいようにしたい

―日本人って、閉じてるとか、自分の意見を言にくいとかあると思うんですけど、留学生から見ると「もつとこうなってほしい」っていうのってあるんですか。

関わってほしい、とは思ってるはず。だから、みなさんから仕掛けていって、友達になってくれたらありがたいなと思う。やっぱり、同年代の人で仲良くなった方が楽しいもんね。どこかへ出かけるにしてもね。だから、二学期に四人、留学生が来るけれど、今度は放課後に、彼らに日本語を教えてあげるような時間をとって、直接交流してほしい。きっかけを作って、一緒に何かをする。例えば、みんなでツアーを考えて、どこかに行ったりとかしたらいいのにね。テストや部活もあって、学生のみなさんは忙しいけれど、交流したら、すごく自分の視野も広がるから良いと思う。言葉が完全に伝わるわけじゃないから、初めはちよつとドキドキするし、何を話していいのかわからなくて、モジモジしちゃう。でも、そういうのを一つずつクリアしていったら、本当に楽しい世界が広がるっていうか。

―ウェルカムパーティーとかありますよね。

あるある。うん。そうそう。留学生にとっては、「自分を受け入れてくれる」と感じられる、すごく大事なイベント。楽しい時間を共有していく友達に出会う時間よね。

―十五年間で、先生自身が「変わったな」って実感した場面はありますか。

それは、いろんな人に出会ったりして、影響受けて、少しずつ変わってきたと思う。割と、いろいろなことを受け入れられるようになってきたかなと感じる。もっと若いときは、「これを教えて、次はこうして」と、無理に教えようとしていた気がする。でも今は、今は、もっと自由に、自分たちで学んでいけるように、もっていきたいなって思ってる。だから、あんまり『先生』っていう感じでは、いないようにしたいと思う。「こらー！」みたいな。今は、守山市の公立小学校で、ペルーから来た男の子の日本語支援員もしているんだけど、小学三年生の頃から支援していて、今六年生。その学年は二クラスで、学年が変わるたびにクラス替えがあつて、私も一緒に動く感じで。何かその、あまり先生っぽくない立場で、でも、教えてほしいときは呼んでくれて、教えてあげる。そういう距離感が、いいなと思うてる。

―めっちゃいいですね。

ね。あんまり『先生』って言う感じじゃなくてね。一緒に楽しくリラックスして、勉強できたらなって。もちろん、日本語の先生ではあるけど、一番の目標は、本当にどうしたらこう、関わる子ども達や留学生が幸せに、長期間過ごせるかっていうこと。はじめは「日本語が話せるように教えてあげる」ことが目標だった。でも、立守生と一緒にいるだけで、留学生は日本語が上手になっていく。だから、私も立守生ともっと

もっと交流させてあげたいけど、なかなかね、立守生との授業もないからね。

―いいこと聞けた気がします。

本当に？ でも、私、立守にいる時間自体はそんなに長くないから、「変化」って言っても、正直よくわからないところもある。まあ先生は、どんどん入れ替わるし、生徒も変わっていくけど、どう変わったんだろうな。

―ずっとコミュニティーセンターですよ。

そう。以前は、国際部がなかったからね。部屋がなかったから、ずっとここ（図書室）にいて教えてた。国際部ができたのってコロナのときだから、その前の五年間くらいは、ずっとこの部屋で。急に授業が休みになったり、授業変更になったりしたときも、「ここに来れば私がいる」と思って、みんな図書館に来てくれた。すぐ環境が良いね、天井も高いし、広々して。留学生は、一日中日本語を聞いて、難しい授業を受けて、すごく疲れているから、ときどき勉強から離れて、違うことをするときもあったけど。「ちよつとカフェへ行ってお茶でも飲もうか」とか言って、のんびりしたり。でも、それも、「カフェで買い物する」っていう勉強だし。やっぱり外で勉強するのも、気持ちがいい。リラックスして。はじめは、私が留学生といろいろな交流を担ってたんだけど、でもその役割をこれからは立守生がやったらいいなと思って。私は、ほんとに楽しく交流してきたから。それを、みなさんが味わってくれたら素敵よね。私は、彼らのおかげで、すごく充実して過ごせてる。どうやったら、それが可能になるのか。今、その仕掛けを、国際部の先生方と考えると。どうしたら、もっと立守生と留学生が、深く関われるかっていう。

―立守生も、それ考えていけないといけないですね。

ね。一緒に考えてもらえたら、本当にいいなと思うけど。

―もともと友達がクラスにみんないるから、留学生が来てもアウェイな感じになっちゃいますよね。

入る余地がないよね。そこに、ちょっと入れてくれたらいいんやけどね。そこよな。外国の人って、仲のいい人はいても、「いつも同じ二人、三人」って決めてないことが多い。違う人と一緒にいても、全然いい、っている感覚がある気がする。

―そっちの方がいいですね。

ね。そうそうそう。たぶん、個人主義というか、一人ひとりが独立してる感じなんかな。だから、グループが固まりすぎると、そこに入るのが難しくなるのかな。

―日本人同士でも、そういうことはあるので。

難しいよね。いろんな人がいるからね。私も、みなさんと同じで、まだ探究してる途中、って感じかな。

【感想】

奥村先生の「留学生は、自分の言葉が完璧に伝わらないもどかしさの中で、留学生同士や立守生と話そうとしているのに対し、立守生は日本語を話す同士なのに話し合う機会が少ない。」という言葉に深く納得させられた。また、留学生はもっと関わりたいと思ってくれていることを知れたから、留学生が立守に来て良かったと思えるような環境を作るために、もっとウェルカムな体制を作っていかなければならないと思った。



右：奥村智恵子さん

左：長岡優芽